小野家と小野家文書

小野家は、備中倉敷における中世からの土豪と伝えられます。小野家の助右衛門は、徳川家康に備中国奉行に任命された小堀正次（こぼりまさつぐ）から、畳表と材木を大坂へ送ることを命じられています。現在の倉敷アイビースクエアの中に明治中期まで茶屋山（古城（こじょう）山、城山ともいう）という小山がありました。備中国奉行小堀父子の茶屋（支配者の屋敷）が置かれたところですが、その後は小野家所有の山になりました。倉敷村の運営を担った古禄の中でも小野家は代表的な家であり、代々の当主は倉敷村庄屋を世襲しました。延享３年（1746）に倉敷代官陣屋ができると、掛屋（かけや）や郡中惣代（ぐんちゅうそうだい）など代官行政を支える機構の中核を担いました。

小野家は倉敷村で一番の地主でもあり、宝永４年（1707）には176石余りを所持するなど経済力も突出していましたが、18世紀中ごろから倉敷代官陣屋改築費の立替などのため経済的苦境に陥り、持高は大きく減少しました。明治時代になると、小野家当主は神職に就きました。

小野家の屋敷の西端に三階蔵があり、古文書がその中で保管されていました。昭和28年（1953)、その一部は岡山大学の所蔵となり、目録は岡山大学附属図書館から刊行されています。それ以外の小野家に残された古文書は、平成９年に小野一臣氏から倉敷市へ寄贈されました。倉敷市は寄贈された文書の目録を作成し、歴史資料整備室のＷｅｂサイトでも公開しています。平成28年にも古文書が寄贈され、さらに令和４年には小堀正次の書状等が寄贈されました。

小野家は大庄屋・庄屋・掛屋・郡中惣代・神職などの役職を歴任したため、小野家文書には江戸時代初期からの倉敷村の運営に関する資料、倉敷代官役所管下幕府領全体の運営にかかわる資料、神職関係資料、和歌・漢詩・俳句・能楽・茶道など文化芸能に関する資料などが含まれています。このように小野家文書は極めて豊富な内容を持ち、江戸時代の倉敷を考えるうえで基礎となる資料です。